

「 想定外とともに、不完全な夏がゆく 」(協同組合通信/風雪弾) 15.8.28

8月23日に、24節気の処暑(暑さの収まる頃)を迎えた。欧州と北米の猛暑、中国の大洪水に日本の長雨・10年ぶりの大冷夏となり、内外で過去のデータを塗り替えた。

沖縄地方を除き、我国では暑さ知らずの不完全な夏が、例年に比べて圧倒的に少ない蝉の鳴き声とともに、最早去り行く。今夏は、これから多少の真夏日が訪れたとしても、夏商戦の消費は叶わない。せめて、米作の不調を少しでも回復できる照りつけを祈りたい、

熱波で凄まじい数の死者が出ているパリジェンヌに捧げたい処暑の響きだ。

北半球の異常気象の徴候は、北極を中心とした500Hpaの高層天気図に現れる。熱エネルギーを持った波(高気圧の気団)が欧州から北米に張り出し、極東付近では、凹部を形成し動かない。今夏はこれがとても強く安定していたことが大きな原因の一つ。

日本の天候への影響は、オホーツク高気圧の勢力が強く、終始、例年のような太平洋高気圧の張出しと安定がみられなかった。長期予報の精度は一朝一夕に進歩しないのが気象関係者の悩み。

今年のような超のつく異常気象は、原因の特定が容易でない。よって、今後も十分にありうる事を想定した、様々な計画や開発を再度練り直す契機として頂きたい。

昨今、自然現象に伴う大災害の後、行政関係者や防災担当者の声として、想定外の災害というマスコミ報道が、しばしば見聞される。果たして、そうだろうか？

想定外と言えるほど、本気で考えられる全てのケースを想定した努力の結果だったのだろうか？

既に多くの事例があり、災害に至った現象の徴候は毎々観測されており、その対策の未熟さと対応の拙さが繰返し指摘されている。

天災は忘れた頃にやってくるという。最も大切な緊急ではないが重要な第二領域の災害対策と情報公開の徹底を忘れてはならない。

多少耳が痛いかもしれないが、今夏の異常気象を反面教師として、関係各位の精進を期待している。自治体のお客様である、住民が安全・安心に暮らせるサービスシステムの再考と整備がなければ、今後、有権者の支持は得られないだろう。

( 気象情報システム株式会社 高津 敏 )